

OPU Students 海外留学レポート

Study Abroad Report from the OPU students



プロフィール (Profile)

氏名 (Name) 笠 恵里花

所属 (School) 工学域 機械系学類

学年 (Grade) 2 回生

留学先 (Name of overseas institution)

モナシュ大学 (Monash College)

留学期間 (study abroad period)

2019/08/09~2019/09/02

記入日 (Date) 2019/09/08

留学レポート Study Abroad Report

留学と行き先を決めた理由

幼少期の海外生活を経験した私が、この夏留学に行きたいと希望した際にまず言われたことは、「何を今更」だった。確かに日本で生活する分には私の英語能力は申し分ないほどに高かったし、大学で専攻している内容は英語とほとんど関わりがないものであるから、その発言も分からないわけではなかった。しかし、私が日本で、自分の現状に不安を抱いていることは周りには理解できないと感じていた。帰国子女として中学高校を過ごした私は、日本の英語教育のレベルに合わせるために非常に苦労した。周りから「英語ができる人」として褒めそやされることに悪い気はしなかったが、日常的に使用しない言語は忘れていくという言葉の通り、私の英語を話す力は年々衰えていた。そしてついに、大学の課外活動でやっている英語のスピーチで厳しい評価を受けたとき、留学の決意を固めた。

大学から提供されている短期留学プログラムの中で最も上級者向けのこのプログラムを選択したのは、留学前の自分の到達度から勧められる唯一のプログラムであったからだけではない。ある程度英語に自信がある人のため、従来の語学留学とは一味違う、語学を用いた職業体験の側面があるこのプログラムは、就職活動を控える自分にとって自分を見つめなおすちょうど良い機会であると感じたからだ。加えて、自分と同じようなレベルで英語を操る人と話せたら…という邪な期待も抱きながら、メルボルンへ出発した。

事前情報として、メルボルンが移民の都市であり、世界で住みやすい都市ランキング上位に位置することは聞いていた。しかし、それ以上に3週間暮らすことでこの街の素晴らしさ（と住みやすさ）をより感じた。そこで、私の留学体験記として、大きく分けて3つの観点からこのプログラムを勧める理由を挙げていきたいと思う。

プログラムの内容、出会った仲間たち

まず、1つ目に研修先のモナシュ大学で得られる経験が貴重なものであったことが挙げられる。他国含めて留学生のみで行われた研修は、語学を学ぶというよりは語学を使ってプレゼンや自己分析を行う、いわゆる就活準備講座のような内容だった。現地で活躍する日系企業の方や、大学で日本語を学ぶ学生との交流もあり、オーストラリアという異国にいるからこそ分かる日本の働き方に特有な内容に目を向けることができた。また、同じクラスにて学ぶ仲間は皆英語に長けている上、将来のビジョンや目的がはっきりしている志の高い人ばかりであった。私が留学前に抱いていた「同じように日本の英語教育に物足りなさを感じている」人に出会うという希望も達成され、大いに満足した。そんな研修期間の間でも、放課後や週末は仲間たちと観光に繰り出したりプロジェクトの成功を祝うために食事に行ったりと、プログラム外でも友人として接することができた。帰国直前には、有志で企画したBBQが行われ、3週間共に過ごした仲間と最後まで別れを惜しむ程であった。



←クラスメイトと
ナイトマーケットにて



あるプロジェクトでのチームメイトと→

ホームステイ先との交流

次に、留学先での生活の基盤となるホームステイ先についてだが、私の体験はあくまでも個人の体験に過ぎないことを強く感じた。前述の通りメルボルンは移民都市と呼ばれるほど国際色が豊かである上、家族の形態も多種多様であるからだ。私のホームステイ先はホストマザーと犬 4 匹の家族構成で、マザーが平日仕事のため家を空けることが多かった。しかし、大学や観光を終えた夜にふたりで食卓を囲み、その後に現地のニュースや人気のリアリティ番組を観ながら様々なことについて話を交わした。日本での生活や留学中の出来事は勿論、テレビの何気ないコマーシャルで私が特殊だと感じたことについての議論や共通の趣味（事前情報ではなく、会話するについて判明した）である旅行や読書についてなど、本当に話が尽きず 2 人での生活でも寂しさを感じることはなかった。加えて、ホームステイ先として何度か経験のあるホストマザーであったからか、家での家事分担（私はほとんどなかったが、家によっては洗濯や部屋の掃除は学生が自分でするとのこと。）やルールが簡潔に提示される、食事である程度まで希望を聞いてくれる（朝食は日本で摂っていたものとほとんど変わらなかった）、プライバシーと共に過ごす時間のバランスがうまく取れているなど、期間限定の「帰る場所」としては十分なほどの環境が提供されていた。



平日の弁当の一例（ほかのホームステイ先に比べてややヘルシー志向であった）→

←ホストマザーと観劇に行った時（犬たちとの写真はレポート最上部）



メルボルンという街

最後に、留学先のメルボルンという街の魅力について紹介したい。再三述べるが、メルボルンは多民族が調和して根付いている街である。大学で教わっていた先生の言葉を借りるとすれば、「通りが変われば国が変わる」という国際色豊かな風土なのだ。また、都市中心部はガラス張りの高層ビルと情緒あるレンガ造りの建物が共存しており、多彩な個性を受け止めるこの都市の魅力を感じさせた。動物園や水族館、ビーチ、遊園地、劇場などが全て回れる範囲にあり観光にも最適な場所であった。留学期間中に雨が降ることはほとんどなく（年による。また、すっきりとした晴天は少なかった）、気温も大きく寒くならず環境としても非常に楽しめた。



←地元で有名なイタリアンレストランでの食事。筆者の手はサイズ比較用



メルボルンのシンボルの 1 つである駅舎。外見に反して、中身は割と近代的→

まとめ

3 週間日本を離れ、知り合いもいない異国で生活することに最初は怖気づいていたことは確かだ。しかし、どのような人でも受け入れるメルボルンの精神に触れ、ほとんど不便なく過ごすことができた。研修途中にホームシックにならなかったのも、帰国する時に実感が沸かなかった（今も）ことも、短期間で溶け込むことを許されるあの都市の素敵なのところなのだと、今振り返ってみて思う。